

# 于武陵詩研究

## —詩語に託された別れの思い—

専攻 教育内容・方法開発専攻  
コース 文化表現系教育コース  
学籍番号 M11161F  
氏名 大谷 純子

### 1. 研究の目的

本論は、『全唐詩』における、于武陵詩の別離観とその変遷を、その作品排列にしたがって、明らかにしようとするものである。

于武陵は、晩唐の詩人である。その生卒年は未詳であり、その伝は、わずかに『唐才子傳』に残るのみである。しかし、彼が、「勸酒」という作品のなかで詠った「人生足別離」という句は、多くの人の知るところとなり、この句は、于武陵の人生観を表出するものととらえられる。しかし、その一方で、彼は、作品に、次のようにも詠う。「昔時は一別を軽んじる」と。

本論は、于武陵詩における、この二つの相反する別離観をとらえ、作品内にみえる、于武陵の別離に対する価値観と変遷を明らかにしようとするものである。

### 2. 論文の構成

本論文は次のような構成である。

はじめに

第一章 于武陵と于武陵詩

第一節 于武陵について

第二節 于武陵詩の傾向

第三節 于武陵の別れの詩

第四節 于武陵詩にみえる表現の特徴

第二章 于武陵詩の別離観

第一節 二つのテキストにおける于武陵詩

第二節 執着「素心應已違」

第三節 葛藤

1 「長安重桃李」

2 「長安無舊山」

3 「多非舊主人」

4 「昔時輕一別」

5 「故人非舊容」

第四節 気づき 「人生足別離」

第五節 受容 「白日急於水」

第三章 『唐人五十家小集』における別離観  
おわりに

### 3. 論文の概要

第一章 于武陵と于武陵詩

第一章においては、于武陵の生涯と、于武陵詩の表現の特徴について論じている。于武陵の別れの詩における、詩語の用例を調査し、その表現方法の特徴を明らかにした。その結果、于武陵が多く用いる表現方法として、次の三つのパターンがあることがみえてきた。

1、既成の詩語どうしを組み合わせ、独自の意味を与える。

2、既成の詩語の意味やイメージを、より限定する。

3、既成の詩語をより詳しく表現する。

第二章 于武陵詩の別離観

第二章においては、于武陵の別離観（別離感情とその変遷）について論じている。その際、第一章で明らかにした、三つの表現の特徴のう

ち、特に1の表現には、于武陵の価値観が表れるものが多くあることから、この表現に注目する方法を用いた。また、于武陵詩が所収されている二つのテキスト『全唐詩』と『唐人五十家小集』を比較した結果、作品の排列に大きな差が見られることから、『全唐詩』の排列を、于武陵詩の一つの解釈ととらえ、『全唐詩』における作品排列にしたがって、于武陵の別離観を明らかにすることとした。

『全唐詩』における于武陵詩は、「人生足別離」を、別離感情の頂点として、その表現に到るまでと、到ってからの感情が、一つの物語のように排列されている。

その過程を、本論では、「執着」「葛藤」「気づき」「受容」ととらえた。

「執着」とは、別れたくないもの、変化を望まないものが存在することである。最初に『全唐詩』は、于武陵が過去に執着する作品を置く。そして、次にふるさとへの執着が表れ、やがて、人への執着に移っていくことが作品からうかがえる。「葛藤」とは、彼が執着するものが、彼の思いとは反対に変化し、そのことに対する于武陵の嘆きである。特に、于武陵の葛藤は、「非」「無」などの、否定的な詩語を添えることによって表出していることが、理解できる。「気づき」とは、人は、限られた時間の上に存在しており、その時間は、本人が自覚するよりも加速度的に経過し、そしてその時間とともに物事が変化していくということに気づくことである。この気づきは、自分の老いに気づくということでもある。そしてその「気づき」が前提となり、于武陵の別離感情は、一気に高まりを見せる。その現れが、于武陵の代表作、「勸酒」において詠われた、「人生足別離」という句である。「受容」とは、于武陵自身が、于武陵が別離を、受容す

る価値観に至った現れである。それは、「白日急於水」という句に、最も顕著に表現されている。于武陵以前の時代の、多くの詩人によって、留めることのできない時を象徴する詩語として使われてきた、「水」という詩語を、「白日」という詩語と比較したものである。于武陵のものの、「白日」という詩語が、この句によって、どのような意味を持ち得るのかを、古詩や、阮籍が使う、「白日」という詩語などと、比べながら、検討した。于武陵の、この価値観は、別離もまた、流れゆく時がもたらす一つの変化に過ぎないという価値観につながってゆくものである。

第三章 『唐人五十家小集』における于武陵詩

第三章においては、『唐人五十家小集』における作品の排列から、『全唐詩』の于武陵詩の排列では、とらえられなかった于武陵の人間像について、論じている。特に、「人生足別離」という句に注目して、その句を含む作品の位置の違いによって、この句がもつ魅力の違いが生じることを述べている。さらに「一別」という詩語と、于武陵自身の、「老い」についての表現をとりあげ、時間の推移にしたがって、彼の「一別」観が、少しずつ変化していることを指摘している。おわりに

まとめとして、于武陵という詩人像を、ふりかえり、于武陵の別離観を支える要素には、次の四つが挙げられことを述べている。その要素とは、ふるさととの別離、過去との別離、人との別離、自分に与えられた時間との別離である。重ねて、『全唐詩』における于武陵詩は、これらの要素のそれぞれが引き立つように、排列されていることを述べている。

主任指導教員 鈴木敏雄  
指導教員 鈴木敏雄